

CHOSHI (第12話)

(平成30年 11月)

川口には二才上の兄がいる。名前は川口翔平。川口翔平は中学2年(平成30年)の夏から中学野球部の主将だった。

日が暮れるのが早くなり、5時を過ぎるとあたりは真っ暗になっていた。副顧問だった押見は前年から入試広報部長になっていた。昨年度は中学が定員割れ、その状況を打破するため、休みなく外回りをしていて、高校生の受験指導もしていたため、練習に顔を出すことはほとんどできなかった。

11月、久しぶりに練習に行くと、部室から一人出てくる川口(兄)がいた。『先生、みんな休みです。俺一人しかいません。』中学野球部は合同チームを結成して臨んだ10月に行われた新人戦を大敗。その試合の翌日、チーム主軸の選手がシニア野球(硬式のクラブチーム)に入るため部活を辞め、部員は川口(兄)を含めて5人になり、チームはまとまりを欠いていた。

『先生、一人で何をすればいいんですか?』川口(兄)の言葉に、私は返事につまった。素振りや、ランニングなど一人でもできることはある。ただ、川口(兄)が聞いているのはそういうことではない気がした。

『ここにいて野球ができるんですか?』そんな風に聞こえた。

私は、川口(兄)にランニングを指示して、誰もいなくなった部室を見渡した。部室の壁の所々に卒業生が残した寄せ書きがあった。懐かしい名前もある。寄せ書きを見ていると様々な思い出が蘇ってきた。押見は25年前に野球部顧問になった。初めは部員が少なかったが徐々に増え、7年前には18人の新入部員が入部した。しかし、3年前から部員が減り始め、ついに練習に来る部員が2~3名になってしまった。

誰もいない部室の中で押見はふっとある考えが脳裏をよぎった。

『川口もシニアに行った方がいいのでは?』野球は一人ではできない。ピッチャーがいて、その球を受けるキャッチャーがいて、後ろを守る野手がいて…。九人の思いを白球にこめるのが野球だ。一人では野球はできない。

川口(兄)のことを思うのであれば、このチーム以外をすすめるべきなのだろうか。しかし、それでは中学野球部は虎の子の選手を失い、存続はより厳しくなる。部室の壁から卒業生達が『それは駄目だ。』と言っているように感じた。

私は、桜美林高校を甲子園優勝に導き、清真学園の野球部を創った濱田宏美先生の顔を思い浮かべた。『濱田先生だったら、この状況をどうするんだろう。』濱田先生の教えを思い出していると、ある言葉を思い出した。

『夢は叶う。嘘と思えば、甲子園に聞け。』